

はくぼく

No201 2013-8-23(金)
責任者 三浦真吾
事務局 吉田朝夫
釧路市美原3丁目57-4 TEL36-7426

訃報

坂東佳子さんご逝去

【八月十一日死去、享年八十三歳】
長いこと入院されていた坂東良子さんが、去る八月十一日、ご逝去されました。

まさかこんなに早く旅立たれるとは思っていませんでした。入院も元気な姿で退院されるものとはかり思っていましたのに、本当に残念でなりません。坂東さんは、退職教の役員を務められたり、婦人活動に進んで取り組まれた方でした。いつも笑顔を絶やさず、何事にも前向きな姿勢は、私達の範として、皆さんから慕われていました。退職教の二泊三日の交流旅行の常連でしたが、二年ほど前だったでしょうか、急に血圧が高くなり、一泊して一人で釧路に帰ったことがありましたが、あの頃から、体調があまり良くなかったと聞いていました。趣味が多彩で、中でもパッチワークが得意の一つだったようです。お通夜の晩に斎場の入り口に、すばらしい作品の数々が展示されていました。

聞くところによりますと、夫の孝一さんも体調を崩し入院されていたとのことでした。本当にもつとつと長生きして欲しかった...と思いつつ、ご焼香をさせて頂きました。

病名は、操発性間質性肺炎とのこと、肺の血管が切れて、血液が肺に入り込んだとのことでした。
この日、友人としてお二人が弔辞を述べました。武山悦子さんと野瀬義昭さんで、心のこもった弔辞でした。

早速、お二人の諒解を得て、原稿をお借りし、「はくぼく」No201号に掲載しましたので、お読み下さい。
尚、翌日の告別式には、浅野幸恵さんも弔辞を述べましたが、後日掲載します。

弔辞

日本民主主義文学会釧路支部 野瀬義昭さん

坂東佳子先生が、文学の月例会などに、姿を現さなくなったのは、昨年三月からです。なにかボツカリ穴が開いたように、さびしくなりました。文学の仲間たちは、体調の回復を心待ちに待ち続けていました。そんな夢もかなわず、ここでこのように、物言えぬ佳子先生に語りかけるのは、言い知れぬ辛いものがあります。多くのエッセーや詩を書いていた佳子先生が、最近病室から五首の短歌を寄せてきました。

・幼子に乗っていたのか たんぼぼの

黄色の中で 揺れる ブランコ

・病室の 窓から見える 公園の

たんぼぼの原 春を告げり

病室の窓辺に立ち、たんぼぼが被褥のように咲き広がる公園を眺めながら、一日も早い退院を待ち望んでいたんですね。寒い冬が過ぎ、雪が解け、春が来ても未だわが家にもどれぬ悲しい気持ち、どれだけに心をつめたことでしょうか。

その春が過ぎ去っても、退院の兆しがありません。更に佳子先生の歌が続きます。

・癒える日の 定かならぬと 告げられて

九か月に入り 夏はきたりぬ

自分の重い病をまかえりみず、いつも夫孝一さんを気づかっていました。食事をきちんと作れているだろうか、買い物はうまく出来ているだろうか、体調はどうかと、見舞いに行くたびに、病室を訪れるたびに聞かされる。その言葉から、あふれるような夫婦愛を感じました。せめて一度だけでもいい、この目で確かめたい。我が家に帰りたい。この歌からにじみ出る佳子先生の切ない思いを、私たち文学仲間の涙をさそいました。もうだめなのか。聡明な芳子先生は、自分の病状の深まりを察知したのか。歌の内容が一変していきます。

・病室の天井の 古いきず跡を

賢治の宇宙に おきかえる

病室の天井のきず痕を見つめながら、歩んできた八十二年間の人生を走馬灯のように、めくる「いま」を宮沢賢治の宇宙の世界に重ね合わせて歌いました。もうすべてを達観した佳子先生の心は、宇宙と昇華されていったんですね。

・天井の 傷痕つなげば カシオペア

オリオン・シリウス プラネタリウムとなる

この歌が行く道を覚悟した一人の女性が残した最後の歌となりました。

佳子先生の女学校時代は、軍事教練でなきなたをやる熱血軍国少女でした。自らが肺門リンパ腺炎になり、負けるなど戦場に送り出した兄を戦争で失いました。そんな辛い体験から、佳子先生は、敗戦後、教師として「再び教え子」を戦場に送らないと、教壇に立ち続けました。日本の平和と民主主義の旗をかかげ、ぶれなく生き抜いた佳子先生の生涯に、心から敬意を表するものです。こよなく文学を愛し、つらい闘病生活の病室にあって、いつも本が積み重ねられていましたね。最後まで文学を手放さず、一途に生き抜いたその姿勢に、多くを学ばされました。

佳子先生の熱い思いを引き継ぐことを、文学の仲間たち一同、お誓いしてお別れの言葉とします。安らかに眠り下さい。

二泊三日宿泊交流会

年一回の宿泊交流会のシーズンがやって来ました。いつもの事ながら、年金者組合との共催です。どうぞ予定の中に入れて、是非、多数ご参加下さるようご案内致します。

・期日 九月一七・一八・一九日(火・水・木)

・場所 ホリデーイン・ホテル十勝川

・参加費 二〇〇〇円

・申込締切 九月一〇日(火) 厳守 吉田36-7426まで

わたたしの近況 その七

「わたたしの近況」の返信がとつぱら多くなりました。一年間の生活の貴重な近況がガキ送って頂き有難うございます。二〇日現在で四十三通が届きました。これからでも間に合います。是非投稿して下さい。お待ちしております。

車椅子の生活になりました

一 戸 俊 夫 さん

月・水・金、きいろいことり。木・土曜日、さくらデ
イサービスに通所しています。一〇〇程度の歩行も困難
になり、車椅子で移動しています。

体力・筋力維持の生活

佐 藤 洋 さん

体力、筋力、維持のため、お天気の良い日は運動公園方面
他に、サイクリングに出かけています。若い頃、靴下をはかな
かつた夫も、今は靴下をはき、寒い日は、出かけるなくなりま
した。(妻記す)

日中友好に二途のくらし

原 聰 さん

相変わらず、日中友好で、いそがしくやっています。
退職教のみなさんには、いつもお世話になっていきます。

事務局担当十五年

吉 田 朝 夫 さん

退職して二十一年。現職当時に罹った脳梗塞の再発もなく、何と
か生きながらえてきました。「わたしの近況」には、高齢者に向かっ
て、身体老化を憂い、足腰が弱った、物忘れが多くなった近況が
たくさん寄せられてありましたが、それから見ると、私もその類に
属しますが、まだまだ元氣な方だと思っている昨今です。

退職事務局十五年は、いささか身にこたえます。今年も総会の
役員改選で、再び二年の任期をおおせつかりましたが、あと二年持
つたらうかと不安が募ります。役員を引受けた当時は、二年だから
大した事ないと、今は亡き藤原和夫さんに薦められての任務でし
たが、ずるずると続き、二年の任期とは、こんなにも長いものとは…

事務局の仕事はあれこれと多忙です。教育関係の記事をとり、民教
集会には欠かさず参加し、活動の様子を知らせること。役員会の前
に「はくばく」のパンコン打ち、以前はワープロでしたが、故障し
てしまい、止む無くパンコンに切り替え、娘に叱られ叱られながら、
何とか届けられる紙面までになりました。役員会が挨拶めするのに、
事前に封筒に宛名ラベルを貼り、会議のシメツクなどの準備をし、
役員会が終わるとホッと一息つきます。打った原稿を家内が点検しま
すが、お互い後期高齢者なもので、見落しが多く、親子腕力が年々
多くなつてきています。会員の中には「親子探しが楽しんだ」と
いわれています。役員会では、急に無役になったら、ボケてしまっ
たら…と言いつつ、慰めをよつかならぬ言葉を言ってくれますが、笑っ
て受け止めるしかありません。その言葉に甘えて、持つかどうか分
からないが、グチをいわず全うしようと思つての頃です。

音楽を友として生きる人生

石 窪 満・しのぶさん

「わたしの近況」読みながら、勇気をもらったり、目標をもらつた
りしています。欠席の報告を口答でしたので、葉書はパスしました
が「近況」読みながら、書かなくちゃ、と思わせてもらいました。
私たち二人も音楽や、音楽教育の分野で活動を続けています。
「生きる力」は、感動したり、したいと願う事実が支えてくれると
思っています。

いつになつても感性を豊かに磨いて生きていきたいものです。

9月のパークゴルフ案内

- ・期日 九月十四日(土)午後一時三〇分
 - ・場所 遠矢108パークゴルフ場
 - ・参加費 なし(ただし入場料300円負担あり)
- ### 八月のパークゴルフの成績

- ・一位 坂井純吾さん 112点
 - ・二位 千葉さん 116点
 - ・三位 八木靖彦さん 122点
- ・工藤さんのホールインワンがありました。
他に、工藤さん、岡部さん、八木夫人、沢谷さんのさんがあり
ました。

再度「記念誌」の原稿依頼について

八月中旬発行を目前に編集を進めてきましたが、実は、
原稿寄稿者が予想以上に少なく、三〇名ということでは、ペー
ジ数にすると三四ページ程度で、裏表の印刷ですので二五・六
枚程度の厚さとなり、これは折角の記念誌としては、お粗
末過ぎるのではと案じ、せめて五〇枚以上の冊子にしたいと
思ひまして、いち早く寄稿頂いた方には大変申し訳ありませ
んが、二二〇名の会員中三〇名で、残りのと九〇名の方に奮
起いただいて、折角の二〇周年記念誌ですので、何とか完成
させたいと思っております。是非、是非一筆を振るつ
て下さい。つきましては、今月いっぱい締め切りとしますので、
日常生活の中のことや、自分の人生観、政治への怒り、等々、
なんでも結構です。発行担当の思いをおくみ頂いて、原稿を
お寄せ戴くことをお待ちしております。
なにとぞ宜しくお願いいたします。

・武山さんと、浅野さんか頂いたお辞の原稿については
掲載スペースが取れませんでしたので、次刊に掲載致
しませんが、ご了承ください。